

学校コミュニティにおける心理職活用に関する 学校マネジメントシステムの開発

—管理職のインタビュー調査を通して—

Development of the school management system in utilizing
counselors in the school community: through the interview survey
by administrators

山口豊一・市川麗・長谷川恵

Toyokazu YAMAGUCHI, Rei ICHIKAWA, Megumi HASEGAWA

要 約

本研究の目的は、現在の心理職活用の問題点や課題点を整理し、心理職を有効に活用していくための学校マネジメントシステムの開発の知見を得ることである。第一筆者によって、調査協力者に半構造化面接が実施された。分析方法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチが用いられた。

その結果、28の概念が抽出され、10の下位カテゴリーに統合された。そしてそれらは、さらに4つの上位カテゴリー「児童生徒の変容」「学校マネジメント」「学校コミュニティの連携」「心理職活用の現状と課題」にまとめられた。これらの上位カテゴリーにおいて、「児童生徒の変容」は「学校コミュニティの連携」、「心理職活用の現状と課題」の【スクールカウンセラーの配置の現状と活動】、「学校マネジメント」の【事例検討会の企画運営】から影響を受けていた。「学校コミュニティの連携」では、【心理職と教員の情報共有】が「心理職活用の現状と課題」の【心理職活用の課題】から影響を受けており、また、「学校マネジメント」の【事例検討会の企画運営】と相互に影響し合っていた。

心理職の活用を促進する要因としては、児童生徒の支援体制を整えたり、スクールカウンセラーをはじめとする心理職の活用を図ったり、事例検討会での児童生徒の理解を促したりすることが肝要であることが明らかになった。また、学校コミュニティ全体の連携が深く関係しており、心理職と教員の情報共有を行うことが重要であることが示唆された。

キーワード：学校コミュニティ、心理職活用、学校マネジメント、管理職、インタビュー調査

1 問題と目的

近年、学校における不登校やいじめなどの問題が大きく注目されている。文部科学省（2014）によると、小学校の不登校人数は24,175人、中学校は95,442人であると報告されている。また、いじめの認知件数においても小学校では118,805件、中学校55,248件、高校11,039件と報告されている。このような深刻な状況に対応するために、文部省（現文部科学省）は、1995年度（平成7年度）から、中学校を中心に「スクールカウンセラー」を派遣する「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」を開始させた。そして、現在においてスクールカウンセラーの配置事業は定着しつつある。しかし、学校コミュニティの中で心理職を活用するための効果的なシステムの開発は未開拓の分野であり、学校心理学の緊急課題と考えられる（石隈，1999）。

学校コミュニティ（学校コミュニティとは、学校を中心とする教育委員会単位の地域・社会）における心理職の活用に関して、山口・伊藤・下平（2012）は、学校内で起きている問題に対して学校の中の組織や人だけでなく、外部の専門機関や心理職との連携を図ることが、問題解決をスムーズに行うことができると学校マネジメントの重要性を示唆している。また、それによって、心理職の雇用や心理職に求められる内容にも影響があると述べている。学校心理学では、心理教育的援助サービスのシステムは3つのレベルで整理されおり（石隈，1999）、第1に「個別の援助チーム」、第2に「コーディネーション委員会」、第3に「マネジメント委員会」であり、学校マネジメントは、学校心理学の心理教育援助的サービスシステムのうちの一つである。

ところで、現在の教育界は、学校教育に関わる援助者が多様化しており、このような援助資源の援助活動を組み合わせて援助を効果的に行うことが望まれている。そのためには学校マネジメント、そしてそれを担うマネジメント委員会の整備と活用の充実が求められている（山口・石隈，2007，2009）。

そこで、本研究では、心理職をよりよく活用するために、現在における小学校、中学校、高等学校の管理職から見た、心理職の活用の問題点や課題を整理する。そして、心理職を有効に活用していくための、学校マネジメントシステムの開発という視点からの知見と示唆を得ることを目的とする。

2 方法

（1）調査時期

2014年6月～8月。

（2）調査協力者

E 県教育研修センターチームアドバイザー1名・主査2名、指導主事1名、現小学校校長1名、高

等学校教育相談部長 1 名，現中学校校長 1 名，現中学校教頭 1 名，合計 8 名。

(3) 調査内容

以下の 3 点について調査をした。

- ① 管理職として心理職活用を促進する学校マネジメントシステムで期待すること
- ② 学校での心理職活用に関する学校マネジメントシステムで考えていること
- ③ 学校での現在の心理職活用に関する学校マネジメントシステムに対する評価・課題

(4) 手続き

第一筆者が，以下の 4 件 (A, B, C, D) のインタビュー調査を行った。なお，インタビュー調査は半構造化インタビュー (面接) を用いた。また，1 件の面接は 30～45 分程度であった。

- ① データ A : E 県教育研修センター主査 2 名，チーフアドバイザー 1 名，指導主事 1 名にグループインタビュー調査を行った。インタビュー調査協力者 (ア～エ) の概要は以下の通りである。

ア : E 県教育研修センター教育相談課主査 5 年目，男性，元小・中学校校長。

イ : E 県教育研修センター教育相談課チーフアドバイザー 3 年目，男性，元高等学校校長。

ウ : E 県教育研修センター教育相談課主査 1 年目，男性，元小・中学校校長。

エ : E 県教育研修センター教育相談課指導主事 4 年目，男性，元小・中学校教諭。

第一筆者 : 学校心理学研究者 (司会)。

- ② データ B : 小学校校長に個別インタビュー調査を行った。インタビュー調査協力者 (オ) の概要は以下の通りである。

オ : F 小学校校長 3 年目，男性，元県・市指導主事。

第一筆者 : 学校心理学研究者 (司会)。

- ③ データ C : G 高等学校教育相談部長に個別インタビュー調査を行った。インタビュー調査対象者 (カ) の概要は以下の通りである。

カ : G 高等学校教育相談部長 2 年目，男性，高等学校教諭。

第一筆者：学校心理学研究者（司会）。

④ データ D：H 中学校校長，H 中学校教頭にグループインタビュー調査を行った。インタビュー調査対象者（キ・ク）の概要は以下の通りである。

キ：H 中学校校長 1 年目，男性，前 I 市教育委員会室長。

ク：H 中学校教頭 2 年目，男性，前 J 県指導主事。

第一筆者：学校心理学研究者（司会）。

3 分析過程と結果

4 件(A～D)のインタビュー調査では，前述の調査内容①～③が質問された。4 件のインタビュー調査は，テープに録音され，すべて逐語記録に起こされた。それは，学校心理学研究者 1 名および臨床心理学専攻の大学院生 2 名により検討された。データ分析にあたっては，木下（1999，2003）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を適用し，インタビュー調査協力者の発言からカテゴリーを生成することを目指した。

（1）予備的分析（ステップ 1）

ステップ 1 では，分析テーマを設定するために，インタビュー調査協力者の発言から，逐語記録の作成を行った。その後，発言の内容を一発言ごとにまとめた。そして，それらのデータについて，内容的に分析を行った（Strauss&Corbin, 1998; Flick, 1995; 木下, 1999, 2003;原田, 2003, 2004）。

（2）発言データの概念化 1（ステップ 2）

ステップ 2 では，インタビュー調査協力者の発言データの概念化を行った。手続きとしては，データ A を対象に，インタビュー調査協力者の発言データを内容のまとまりごとに集め，ワークシートを作成した（木下，1999）。そして，抽象的な概念名を付けた。

TABLE1 はその具体的な手続き例である。概念は，学校心理学研究者 1 名および，臨床心理学専攻の大学院生 2 名によって検討された。その結果，12 の概念が生成された。概念は以下の通りである。「1.スクールカウンセラーと教員の情報共有」「2.連絡調整の役割」「3.心理職活用の課題」「4.事例検討会の開催」「5.援助体制作り」「6.スクールカウンセラーと教員の意味疎通」「7.事例検討会の設定」「8.事例検討会による教員の教育」「9.アンケートの活用」「10.ケースの現状把握」「11.コーディネーターの活用」「12.スクールカウンセラーの配置の現状」。TABLE1 に示された「発言データ」は

一部であり、実際には多くのデータが各々の「概念」にまとめられた。

TABLE1 概念のカテゴリー化（ステップ2）

概念		スクールカウンセラーの配置の現状
調査データ	定義	小・中・高におけるスクールカウンセラーの配置の現状
A-33		スクールカウンセラーに預ける仕事っていうのは、学校によっても違いますよね。定期的に来る日、あるいは定期的に相談を受ける子、あるいは不定期でも1日来れば何件くらい。
A-41		高校の場合は4時間でしょ？そうすると、いま自分がこういう日に集まって、っていうのは難しいよね。4時間の中で、せいぜい出られるのは、授業開いている人と、カウンセラーの話し合いの場を相談ができればすぐにやっちゃう、そういうシステムの場合ですね。
A-60		高校は1本だから、生徒指導にやっているとしますよ。
A-61		高校も全校配置みたいになっているんですけど？全校配置になってない？中学校でしたっけ？
A-63		高校は全校配置って方針はないんだ？
A-64		スクールカウンセラー配置っていうのは高校の場合予算が少なく、多くの学校に行けないから。
理論的メモ		中学校はスクールカウンセラーが全校配置であるが、小学校、高校は全校配置ではない。

(3) 概念化2（ステップ3）

ステップ3では、ステップ2で概念化した発言データに、データCを追加し、概念化を行った（TABLE2）。なお、データBからは追加できるものがなかった。

手続きは、ステップ2と同様に行った。その結果、ステップ2で生成された12の概念に追加・修正され、18の概念が生成された。以下にそれを記す。

「1.スクールカウンセラーと教員の情報共有」「2.連絡調整の役割」「3.心理職活用の課題」「4.事例検討会の開催」「5.援助体制作り」「6.スクールカウンセラーと教員の意思疎通」「7.事例検討会の設定」「8.事例検討会による教員の教育」「9.アンケートの活用」「10.ケースの現状把握」「11.コーディネーターの活用」「12.スクールカウンセラーの配置の現状」「13.校務会や研修会の参加助言」「14.管理職の役割」「15.子どもの主体性の成長」「16.援助の成果」「17.専門知識の必要性」「18.保護者との繋がり」であった。

TABLE2 概念のカテゴリー化 (ステップ3)

概念		スクールカウンセラーの配置の現状
調査データ	定義	小・中・高におけるスクールカウンセラーの配置の現状
A-33		スクールカウンセラーに預ける仕事っていうのは、学校によっても違いますよね。定期的に来る日、あるいは定期的に相談を受ける子、あるいは不定期でも1日来れば何件くらい。
A-41		高校の場合は4時間でしょ？そうすると、いま自分がこういう日に集まって、っていうのは難しいよね。4時間の中で、せいぜい出られるのは、授業開いている人と、カウンセラーの話し合いの場を相談ができればすぐにやっちゃう、そういうシステムの間ですよ。
A-60		高校は1本だから、生徒指導にやっているとしますよ。
A-61		高校も全校配置みたいになっているんですけど？全校配置になってない？中学校でしたっけ？
A-63		高校は全校配置って方針はないんだ？
A-64		スクールカウンセラー配置っていうのは高校の場合予算が少なくて、多くの学校に行けないから。
C-1		これは県から配置されてますので、係の方で、スクールカウンセラーの申請、事務処理をしている形になるんですが。スクールカウンセラー配置が決まった段階で、担当と実際にいつから何をしてもらいますとかと言うことを話し合っていますね。原則、年間34~35回だったかな。状況によっては減るときはあるんですが。1週間に1回で。1回あたり4時間で、半日です。
C-2		これは学校に来てもらうっていうよりも、県でやってるので。予算の問題も出てきますから。
C-3		その方がスクールカウンセラーだけで1本に徹しているか、それともほかの臨床心理士の仕事の傍ら、週に何回か学校に出向いているかはケースバイケース。
C-5		まあ、全県下で配置になってますし。なかなかこの学校だけ週2日というわけにはいかないんですよ。
理論的メモ		県から配置されているため、もっと来てほしくても、予算の関係で来られないという現状が見られた。

(4) 概念化3 (ステップ4)

ステップ4では、ステップ3で概念化した発言データにさらにデータ D を追加し、概念化を行った (TABLE3)。

手続きは、ステップ3と同様に行った。その結果、ステップ3で生成された18の概念に追加・修正された28の概念が生成された。28の概念は、研究協力者ア〜エにメンバーズチェックを受け、「3.心理職活用の課題」は「ケース会議の課題」に、「8.事例検討会による教員の教育」は「事例検討会による教員の資質能力の向上」に、「13.校務会や研修会の設置」は「校務会や研修会の参加助言」に、「21.カウンセリングの問題点」は「スクールカウンセラー活用の課題」に、「22.スクールソーシャルワーカーの問題点」は「スクールソーシャルワーカー活用の課題」に、「25.校長の思い」は「校長の担任への期待」に、「27.学校側の課題」は「学校の課題」に、「28.学校の取り組み」は「カウンセリングルームの運営」にそれぞれ修正された。以下にそれを記す。

「1.スクールカウンセラーと教員の情報共有」「2.連絡調整の役割」「3.ケース会議の課題」「4.事例検討会の開催」「5.援助体制作り」「6.スクールカウンセラーと教員の意思疎通」「7.事例検討会の設定」「8.事例検討会による教員の資質能力の向上」「9.アンケートの活用」「10.ケースの現状把握」「11.コーディネーターの活用」「12.スクールカウンセラーの配置の現状」「13.校務会や研修会の参加助言」「14.管理職の役割」「15.子どもの主体性の成長」「16.援助の成果」「17.専門知識の必要性」「18.保護者とのつながり」「19.教師の現状」「20.学校の現状」「21.スクールカウンセラー活用の課題」「22.スクールソーシャルワーカー活用の課題」「23.地域との連携」「24.スクールカウンセラーの生徒へのアピール」「25.校長の担任への期待」「26.他機関の活用」「27.学校の課題」「28.カウンセリングルームの運営」であった (TABLE4)。TABLE3に示された「発言データ」は一部であり、実際には多くのデータが各々の「概念」にまとめられ、4件のデータが十分に説明されるまで、概念は繰り返し修正された。

TABLE3 概念のカテゴリー化 (ステップ4)

概念		スクールカウンセラーの配置の現状
調査データ	定義	小・中・高におけるスクールカウンセラーの配置の現状
A-33	スクールカウンセラーに預ける仕事っていうのは、学校によっても違いますよね。定期的に来る日、あるいは定期的に相談を受ける子、あるいは不定期でも1日来れば何件くらい。	
A-41	高校の場合は4時間でしょ？そうすると、いま自分がこういう日に集まって、っていうのは難しいよね。4時間の中で、せいぜい出られるのは、授業開いている人と、カウンセラーの話し合いの場を相談ができればすぐにやっちゃう、そういうシステムの場合ですよね。	

A-60	高校は 1 本だから、生徒指導にやっているといますよ。
A-61	高校も全校配置みたいになっているんですけど？ 全校配置になってない？ 中学校でしたっけ？
A-63	高校は全校配置って方針はないんだ？
A-64	スクールカウンセラー配置っていうのは高校の場合予算が少なくて、多くの学校に行けないから。
C-1	これは県から配置されてますので、係の方で、スクールカウンセラーの申請、事務処理をしている形になるんですが。スクールカウンセラー配置が決まった段階で、担当と実際にいつから何をしてもらいますとかと話すことを話し合っていますね。原則、年間 34～35 回だったかな。状況によっては減るときはあるんですが。1 週間に 1 回で。1 回あたり 4 時間で、半日です。
C-2	これは学校に来てもらうっていうよりも、県でやってるので。予算の問題も出てきますから。
C-3	その方がスクールカウンセラーだけで 1 本に徹しているか、それともほかの臨床心理士の仕事の傍ら、週に何回か学校に出向いているかはケースバイケース。
C-5	まあ、全県下で配置になってますし。なかなかこの学校だけ週 2 日というわけにはいかないんですよ。
D-32	2 週間に 1 回ではやっぱり、校長から助言をもらいまして、それでは少ないだろうと。確かにその場になってみれば 2 週間ずっと悶々としているよりは、別な方で 1 週間に 1 回話を聞いてもらう、具体的なアドバイスをもらえるのであればっていう気持ちにもなるのかな、っていう思いはありますね。
D-33	一番いいのは学校に常駐してもらえればいいであろうけど、それもそうもいかない。
理論的メモ	スクールカウンセラーが来る日が 2 週間の 1 度では少ない、常駐してほしいなど、スクールカウンセラー配置における課題が見られた。

TABLE4 概念名と発言データ例（ステップ4）

概念名	発言データ例
1. スクールカウンセラーと教員の情報共有	カウンセリングっていうもの自体を学校の先生が知らない。なんでこの情報こっちに教えてくれないのっていう誤解がある。どこまでの情報を流していいの、とか、学校の先生たちもよく知らない。
2. 連絡調整の役割	そうですね。その人たちを活用するためにも、委員会を、3人体制で今やっているんですけど、連絡調整っていうか、そういうのを一人、一応担当が決まっています、その人を利用してありますね、常に。
3. ケース会議の課題	だから、週1の時にカウンセリングの時間とケースの時間とを分けて、ケース検討できたが一番いい
4. 事例検討会の開催	生徒指導部長と学年主任に報告する、そういう一連の流れを決めてってことですよ。事例がまあ2、3つあっても、話し合いをするような相談の配置、組み方ね、それをやった方が現実的。管理職も入れてね。
5. 援助体制作り	その時間が合えばいいし、合わないときにそうするかっていうのもあるけど、勤務時間のこともあるしね。双方向にシステムが出来ていないと、有効な活用ができないかと。
6. スクールカウンセラーと教員の意思疎通	うまくいってる学校の先生の話だと、カウンセラーの勤務時間、随分終わっているのに、遅いのになら資料をまとめてくれたりだとか、教職員と意思疎通できているカウンセラーは、うまくいっているような話をよく聞きます。
7. 事例検討会の設定	まあ、位置付けてしまえば、研修だってやってしまえば基本的に全員出てくださいよって。頻繁に、スクールカウンセラーが来る月1、2回やったらいいんだけど。
8. 事例検討会による教員の資質能力の向上	学校全体に事例を通して、似たような場面に遭遇するかもしれないから、その時に活用してもらおうっていう。
9. アンケートの活用	最初はアンケートをするでしょ、アンケート調査の質問項目をどんなふうにするかですよ。
10. ケースの現状把握	確かにさ、どういうケースをやっているのか把握するのは大変だよ。その役目を新たに作るか、生徒指導部長の仕事の一つにしちゃうかというね。
11. コーディネーターの活用	常時コーディネーター役の役割を担うひとが関わってないともうぐらたたきなんですよ。あとに利かないんですよ。もしそこにもうひとり、コーディネーター役の人がいると、他の事例に移移できるんですよ。出した事例の提供者とスクールカウンセラーだけでは発展がないんですよ。
12. スクールカウンセラーの配置の現状	スクールカウンセラー配置っていうのは、高校の場合には予算が少なく、多くの学校に行けないから。
13. 校務会や研修会の参加助言	自分なりにその、資料をA4、2枚くらいの形にまとめるような形での話はさせて頂いていますね。
14. 管理職の役割	校長先生が、コーディネーターを更にこう、力をつけて育てようっていう面では、連携をなさないと、連携の促進をしなるとか。専門医との連携を取らせるよう勧めるとかね。そういうマネジメントが必要なんですよ。
15. 子どもの主体性の成長	中には特別支援の要素を持っている子も、いますから。その子がグループの中に入って、一緒に子どもと学べたとか。あるいは発表できたとか。

16. 援助の成果	それが一つ、折り合いをつける、その、一つのステップなのかなっていう風に考えると、そこで「ああ、よくできたねって」「今日はパニックにならず済んだね」っていう状況が、褒め言葉にもなるし、子どもの自信にもつながっていくような部分が出てきているので、自閉情緒学級にいる子どもでも、やっぱりこう、戻れるようになってきているんですよ。
17. 専門知識の重要性	そのために臨床心理士の方の力をお借りして必要があるなっていう風に考えています。
18. 保護者とのつながり	子どもへも関わり方を具体的に教えてもらう。だから保護者へも、例えばこういういいことがありましたよっていうところからこう、繋がりを持って、信頼関係を深めながら、学校と同じ方向を向いていけるような形を模索していこうとしているんですが。
19. 教師の現状	絶対できないですよ。逆に担任が家庭訪問するのも大変かなと思いますよ、見ててはね。だって空き時間だってそんなあるわけではないし、小学校なんて0ですからね。ほぼ。
20. 学校の現状	まあうちなんかは情緒学級の相談が多かったかな。不登校気味の子とか、情緒不安定気味の子の方が多かったかなって。
21. スクールカウンセラー活用の課題	正直言うとカウンセラーが週1だと予約が殺到している時があって、もう少し来てくれないかな。
22. スクールソーシャルワーカー活用の課題	先生たちが対応できないところを、変わりに行って親とか子どもの意見を聞いて、コーディネートしてあげるとありがたいですよ。
23. 地域との連携	この〇〇小学校の特別支援の方がある程度、地域から信頼されて理解をしてもらっている状況があるかなって。
24. スクールカウンセラーの生徒へのアピール	必ずロングホームルームのどこかでカウンセラーデビュー講座とって、学年集会でスクールカウンセラーの講座をやってもらうんですよ。カウンセラーってこうなんだよっていう。それが一つのきっかけになっている。
25. 校長の担任への期待	通常学級の普通の子どもたちに対しての関わりは、もう通常学級の先生たちをお願いして、信頼して、どんどん学級経営を進めてほしいって考えを持っているんですが。
26. 他機関の活用	まだまだね、関係機関は連携しなきゃなんないと思うよ。特にさっき言った保護観察所だってそうだし、児相だってそうだし、こまめにやっぱり、その状況に応じて関係機関を活用しないと、まだ十分ではないんですよ。警察もそうだし。
27. 学校の課題	今年は特にスクールソーシャルワーカー、今まで実は、あの、まあどんなもんだらうかっていうのはあのー、ものも意識の中にあっただので、あまりあの、活用がされてなかったんですね。でー、あのー、こう4月に校長がこちらに来まして、積極的に使えとお願いするようになりまして、こうどんどん進んでいくので、こう、手をこまねいてしまったんだと反省するくらいですね、あの、やっぱり動いてくださることで先生方の意識も変わっていくし、本人とか保護者の意識も変わっていくことが目に見えて見えますので、あー、今までなんで活用しなかったんだらうっていう反省と同時にですね、ありがたいって思いいっぱいなんですよね。
28. カウンセリングルームの運営	まあそういう教室が多くても少なくとも、それを必要としている子が一人でもいれば、やっぱり用意して、あの一少しでもいい方向に持っていければいいかなって。

(5) 下位カテゴリーへの統合 (ステップ5)

ステップ5では、インタビュー調査者の発言の【下位カテゴリー】を生成することを目指した。

手続きは、ステップ4で生成された「概念」において、共通要素のある「概念のまとめ」を作り、下位カテゴリー化を図った (TABLE 5)。以下に、下位カテゴリーの統合の例を示す。

「15.子どもの主体性の成長」「16.援助の成果」は【児童生徒の変容】のカテゴリーに統合された。「4.事例検討会の開催」「7.事例検討会の設定」「8.事例検討会による教員の資質能力の向上」は【事例検討会の企画運営】に統合された。「19.教師の現状」「20.学校の現状」「27.学校の課題」「25.校長の担任への期待」は【学校の現状と課題】に統合された。「9.アンケートの活用」「11.コーディネーターの活用」「28.カウンセリングルームの運営」「13.校務会や研修会の参加助言」「5.援助体制づくり」「17.専門知識の重要性」は【学校の取り組み】に統合された。「2.連絡調整の役割」「14.管理職の役割」は【学校内の役割】に統合された。「18.保護者とのつながり」「23.地域との連携」は【地域・保護者・専門機関の関わり】に統合された。「1.スクールカウンセラーと教員の情報共有」「6.スクールカウンセラーと教員的意思疎通」「10.ケースの現状把握」は【心理職と教員の情報共有】に統合された。「26.他機関の活用」は【援助体制作りのための調整】に統合された。「12.スクールカウンセラーの配置の現状」「24.スクールカウンセラーの生徒へのアピール」は【スクールカウンセラーの配置の現状と活動】に統合された。「3.ケース会議の課題」「21.スクールカウンセラー活用の課題」「22.スクールソーシャルワーカー活用の課題」は【心理職活用の課題】に統合された。

(6) 上位カテゴリーへの統合 (ステップ6)

ステップ6では、ステップ5で生成された【下位カテゴリー】をさらに内容のまとめごとによりまとめ、《上位カテゴリー》化を図った (TABLE 5)。以下に上位カテゴリーへの統合の例を示す。

【児童生徒の変容】は《児童生徒の変容》、【事例検討会の企画運営】【学校運営の現状と課題】【学校の取り組み】【学校内の役割】は《学校マネジメント》に統合された。【地域・保護者・専門機関の関わり】【心理職と教員の情報共有】【援助体制作りのための調整】は《学校コミュニティの連携》に統合された。【スクールカウンセラーの配置の現状と活動】【心理職活用の課題】は《心理職活用の現状と課題》に統合された。

TABLE5 概念のカテゴリー化 (ステップ5)

概念	下位カテゴリー	上位カテゴリー
15. 子どもの主体性の成長	児童生徒の変容	児童生徒の変容
16. 援助の成果		
4. 事例検討会の開催	事例検討会の企画運営	学校マネジメント
7. 事例検討会の設定		
8. 事例検討会による教員の資質能力の向上		
19. 教師の現状	学校運営の現状と課題	
20. 学校の現状		
27. 学校の課題		
25. 校長の担任への期待		
9. アンケートの活用	学校の取組み	
11. コーディネーターの活用		
28. カウンセリングルームの運営		
13. 校務会や研修会の参加助言		
2. 連絡調整の役割		
14. 管理職の役割		
5. 援助体制作り		
17. 専門知識の必要性		
26. 他機関の活用		地域・保護者・専門機関の 関わり
18. 保護者とのつながり		
23. 地域との連携		
1. スクールカウンセラーと教員の情報共有	心理職と教員の情報共有	学校コミュニティの連携
6. スクールカウンセラーと教員の意思疎通		
10. ケースの現状把握		
12. スクールカウンセラーの配置の現状	スクールカウンセラー配置の 現状と活動	心理職活用の現状と課題
24. スクールカウンセラーの生徒へのアピール		
3. ケース会議の課題	心理職活用の課題	
21. スクールカウンセラー活用の課題		
22. スクールソーシャルワーカー活用の課題		

(7) カテゴリーの概念図の作成 (ステップ7)

ステップ7では、ステップ2～6で生成された概念、下位カテゴリー、上位カテゴリーについて、相互関係を検討し、概念図を作成した (FIGURE 1)。

その結果、《児童生徒の変容》は、《学校コミュニティの連携》【スクールカウンセラーの配置の現状と活動】【事例検討会の企画運営】に影響を受けていることが明らかになった。【心理職と教員の情報共有】は【学校の取り組み】【心理職活用の課題】から影響を受け、【事例検討会の企画運営】とは影響し合っていることが示唆された。

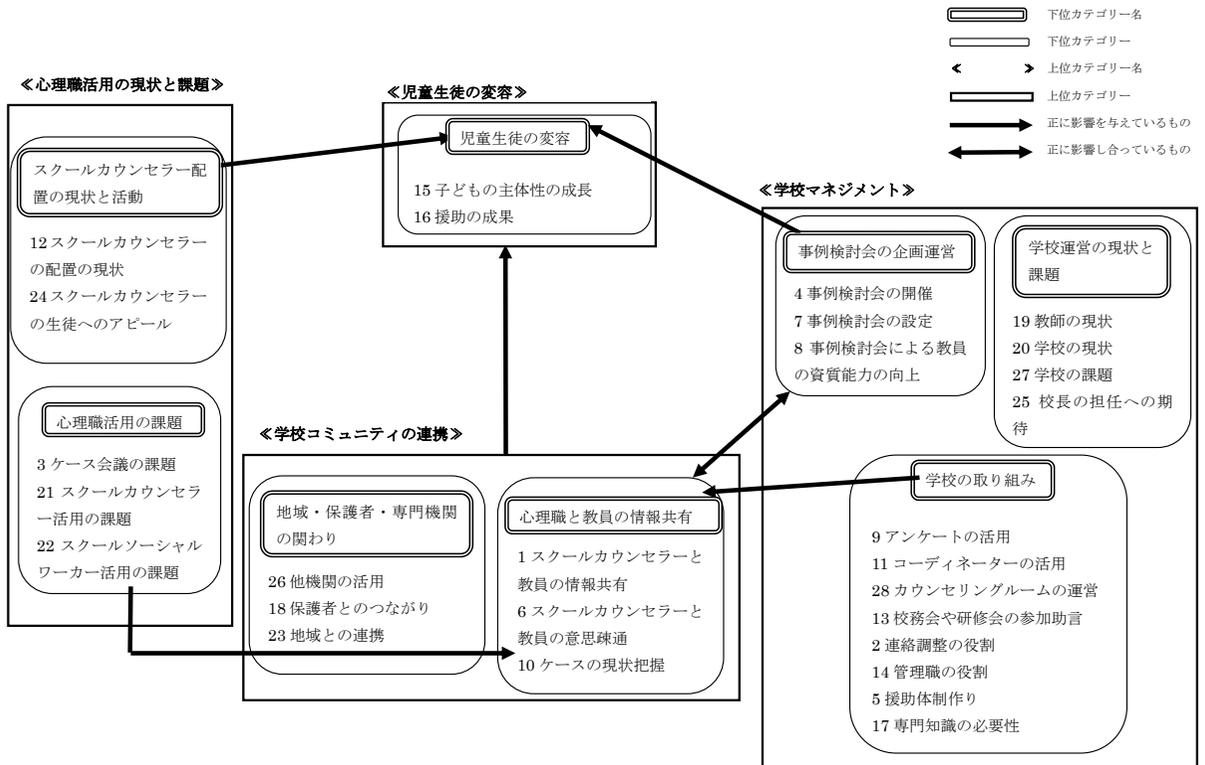


FIGURE1 学校コミュニティにおける心理職活用のマネジメントシステムの概念図

4. 考察

1) 研究から得られた知見

本研究では、「学校コミュニティにおける心理職活用に関する学校マネジメントシステムの開発」を主題とし、管理職のインタビュー調査を基にして、具体的に検討することを目的とした。その結果、28の概念が得られ、10の下位カテゴリーにまとめられ、さらにそれは4の上位カテゴリーに統合された。カテゴリー生成を通じて、本研究で新たに見出された知見は以下の通りである。

(1) 本研究から生成された上位カテゴリー

①<<児童生徒の変容>>

この下位カテゴリーは【児童生徒の変容】であり、支援をしていく中での児童生徒の変化や成長に関するものである。この上位カテゴリーでは、児童生徒に対して段階を踏んで支援をすること、一つひとつできたことに対して良く褒めることが児童生徒の自信になり変化や成長を生むことが示唆された。具体的には、通常学級に戻れるようになったり、通常学級の児童生徒たちとグループワークができるようになったことなどであった。

②<<学校マネジメント>>

この上位カテゴリーは、【事例検討会の企画運営】【学校運営の現状と課題】【学校の取組み】【校内の役割】の4つの下位カテゴリーが統合されたカテゴリーである。学校内における援助体制の組織づくりに関するものである。

【事例検討会の企画運営】では、事例検討会を行う際に、取り上げる事例は1つの事例を取り上げ、深く意見を交わすことが、支援における教師の学びを深めることにつながることを示唆された。また、事例検討会をどのようにスケジュールに組み込むかについて、全ての教員が参加できなくても空き時間を活用し、より多くの教員が参加できる時間を見出すこと、その際にスクールカウンセラーに声をかけ、専門的意見も聞ける場を設定することが望まれることが示唆された。

【学校運営の現状と課題】は、学習指導や生徒指導など通常の職務と並行して児童生徒の支援をすることへの困難さ、問題を抱えている児童生徒への理解に関する内容であった。現在支援が必要な児童生徒を把握すること、その上で学校側と心理職が支援における双方の役割について、十分な理解をし、意見を交わしていくこと(情報共有)が重要であることが示唆された。また、教師は心理職と積極的に関わり、活用していく意識をもって支援に望むことが重要であることが示唆された。さらに校長は、支援体制を整えるにあたって、担任、コーディネーター、心理職等にそれぞれ要望を抱えていることが示唆された。校長は、担任、コーディネーター、心理職等の役割を把握し意見をすることで、具体的な支援方法を探ることができ、それぞれの役割がより機能することが考えられる。

【学校の取組み】は、コーディネーターの教員と心理職をつなぐ役割、双方の意見を交わす場の設定の重要性に関するものである。コーディネーターを活用することで、教員とスクールカウンセラーのやり取りや、研修会を多く設けることで、援助が円滑にすすむことが示唆された。また、アンケートを通して、教師や心理職が支援に対する評価をすることで、支援を見直すことができ、改善を図ることができると考えられる。また、時間割や勤務時間が限られる中で、積極的に双方が歩み寄り話し合う時間をつくったり、わかりやすい資料等の作成で伝え合うことにより、効率的にケースの現状把握ができることが示唆された。また、児童生徒への関わりあいに関して、専門的な立場であるスクールカウンセラーや医師などの知識や意見を取り入れることで、教員が児童生徒への理解や支援の広が

りを持つことができることが示唆された。

③《学校コミュニティの連携》

この上位カテゴリーは、【地域・保護者・専門機関の関わり】【心理職と教員の情報共有】の2つの下位カテゴリーが統合されたカテゴリーである。学校コミュニティにおける連絡調整，学校コミュニティ内の役割の理解や信頼に関するものである。

【地域・保護者・専門機関の関わり】では，学校側と保護者の間で，児童生徒への関わり方について頻繁に連絡を取り合うこと，同じ目的意識を持って支援をしていくことで信頼関係を深めていくことが示唆された。さらに，現在動いているケースの把握が必要であることが示された。そのために，生徒指導部長やコーディネーター等，ケースの現状を把握する担当者を決めることが重要であると考えられる。

【心理職と教員の情報共有】では，スクールカウンセラーがどのように学校側と関わりあうかで，支援の方向性が変わっていく可能性が大いにあることが示唆された。カウンセラー側も限られた勤務時間の中で，教師にわかりやすい資料作成をしたり専門的な事項について教師にわかりやすく伝えたりすることができることにより，円滑に支援がなされることが示唆された。

④《心理職活用の現状と課題》

この上位カテゴリーは【スクールカウンセラーの配置の現状と活動】【心理職活用の課題】の2つの下位カテゴリーが統合されたカテゴリーである。

【スクールカウンセラーの配置の現状と活動】は，スクールカウンセラーが学校側にスクールカウンセラーの役割について理解を深めてもらおうとする活動に関するものである。スクールカウンセラーの人物像や学校での役割や利用の仕方について理解を深めてもらうために，ホームルームや学年集会でカウンセラーが生徒に対して仕事を紹介するなどの取り組みをすることで，生徒のスクールカウンセラーに対する理解が深まり，スクールカウンセラーがより近い存在になることが示唆された。また，スクールカウンセラーの配置にあたり，予算の問題やスクールカウンセラーの勤務時間の問題などがある。スクールカウンセラーの配置に関しての問題と学校側の要望を明確にさせ，教師と心理職の間で意見を交わすことによって，心理職の活用の現状の把握と改善につながる事が考えられる。

【心理職活用の課題】は，スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどが，学校側のニーズに柔軟に対応して欲しいという要望に関するものである。ケース数や進み具合を考慮しながら，ケースにかかる時間と事例検討会を設置することについて柔軟に対応して欲しいということ，またスクールソーシャルワーカーには，学校と保護者・他機関のコーディネーター役として活動して欲しいことが示唆された。

2) 学校コミュニティにおける心理職活用のマネジメントシステムの関係

概念図 (FIGURE 1) は、インタビュー調査協力者の発言におけるカテゴリー同士の影響関係について示したものである。

上位カテゴリーの《児童生徒の変容》は、上位カテゴリーの《学校コミュニティの連携》、下位カテゴリーの【スクールカウンセラーの配置の現状と活動】【事例検討会の企画運営】から影響を受けていた。また、上位カテゴリーの《学校コミュニティの連携》は、支援者（教員、スクールカウンセラー、保護者、地域、専門機関）が、支援において情報交換をしたり、支援者同士が同じ目的意識を持って支援を行ったりしていくなど、《学校コミュニティの連携》を図ることにより児童生徒の変容や支援の成果につながると考えられる。

【スクールカウンセラーの配置の現状と活動】においては、スクールカウンセラーの人物像や仕事内容がクリアになり、より近い存在になることで、児童生徒や教員のスクールカウンセラーへの理解や信頼の度合いが増すと考えられる。それにより、スクールカウンセラーに相談を求められるようになり、スクールカウンセラーと教員の連携が円滑に進み、児童生徒の変容や成長につながると考えられる。そして、【事例検討会の企画運営】においては、支援者がこれまでの支援を振り返り、今後の支援についての提案をし、対象となる児童生徒への支援による変容や成長だけでなく、類似した事例の児童生徒の変容や成長にもつながると考えられることが示された。このように、支援における支援者同士の情報共有や意見交換の場、支援者が直接児童生徒と関わりあえる場が、児童生徒の変容につながることを示唆される。

下位カテゴリー【心理職と教員の情報共有】は、【学校の取り組み】【心理職活用の課題】から影響を受け、【事例検討会の企画運営】と影響し合っていると考えられる。【学校の取り組み】においては、特別支援コーディネーター等が、スクールカウンセラーと教員の時間を調整し、話し合いの場を設けることで、支援が円滑に進むことが示唆される。また、【心理職活用の課題】においては、心理職の滞在時間や来校の頻度によって、教員との情報共有の時間が確保できるか、意思疎通ができるかということに対して影響を与えることが示唆されている。さらに、【事例検討会の企画運営】は心理職と教員が支援において話し合いを進めるだけでなく、心理職の専門的な知識が教員の児童生徒への理解の向上や、支援の方法に広がりをもたせると考えられ、教員の援助力の向上につながると考えられる。

以上より、児童生徒の支援体制を整え心理職の活用を促進する要因として、スクールカウンセラーをはじめとする心理職の活用、学校マネジメントの一環である事例検討会での児童生徒の理解、学校コミュニティ全体の連携が深く関係していることが示された。

そして、学校コミュニティ全体で連携するにあたり、欠くことのできない要素として心理職と教員の情報共有をしっかりと行うことが挙げられた。情報共有をするためには、事例検討会の企画運営や教師と心理職の間で連絡調整をするコーディネーターの活用、心理職活用上の課題について学校と心理職とで協議するなどの改善への努力、学校での取り組みの工夫が望まれることが明らかとなった。

これらの要素が学校マネジメントシステムの構築の中で一つの目安になると考えられる。

3) 本研究の限界と今後の課題

本研究では、学校コミュニティにおける心理職活用のマネジメントシステムを明らかにするため、管理職にインタビュー調査を実施した。

学校コミュニティは、学校を中心とする市町村教育委員会単位の地域・社会であり、地域社会とのつながりを持って形成されている。地域社会が、学校コミュニティに与える影響は大きい。したがって、E 県の小・中学校、高等学校という限られたデータであり、偏りがあることが考えられる。よって、E 県特有のカテゴリーである可能性がある。今後は、本研究で得られた知見と、他県の学校コミュニティにおける心理職活用のマネジメントシステムと比較し、検討していく必要がある。

なお、この研究は、平成 26 年度～28 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）（課題番号 26380899）を受けた。

参考・引用文献

- Anselm Strauss, Juliet Corbin (1998). *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded theory*, 2nd ed. Sage Publications.(操華子・森岡崇氏／(訳) (2004). 質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 医学書院).
- Flick, U. (1995). *Qualitative Forschung: Theorie, Methoden, Anwendung in Psychologie und Sozialwissenschaften*. Reinbek bei Hanburg: Rowohlt. (小田博士・山本則子・春日 常・宮地尚子(訳) (2002). 質的研究入門—(人間科学)のための方法論 春秋社).
- 原田杏子 (2003). 人はどのように他者の悩みを聞くのか—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる発言カテゴリーの生成— 教育心理学研究, **51**, 54 - 64.
- 原田杏子 (2004). 専門的相談はどのように遂行されるか—法律相談を題材とした質的研究— 教育心理学研究, **52**, 344 - 355.
- 石隈利紀 (1999). 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス— 誠信書房.
- 木下康仁 (1999). グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的研究の再生— 弘文堂.
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い— 弘文堂.
- 文部科学省 (2014). 平成 25 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について.
- 山口豊一・石隈利紀 (2007). 中学校における学校マネジメント委員会にどのような機能があるか—企画委員会を題材とした質的研究—筑波大学学校教育論集, **29**, 51-62.
- 山口豊一・石隈利紀 (2009). 中学校における学校マネジメント委員会の意思決定プロセスと機能に関する研究 学校心理士年報, **1**, 69-78.

山口豊一・伊藤花奈・下平幸枝 (2012). 学校コミュニティにおける心理職活用システムに関する基礎的研究-
修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによるカテゴリーの生成- 跡見学園女子大学文学部紀要, **47**,
107-120.

※本研究にご協力いただいた先生方に,感謝致します。